共催セミナー（一般社団法人日本エステティック協会）

透析患者を支えるソシオエステティックの実践から
～エステティックと医療の境界～

酒井　咲子　le soleil（ルソレイユ）代表
AJESTHE認定ソシオエステティシャン



安全で信頼されるエステティックサービスの提供には、医療との目的・役割の違いを理解し、専門領域と実施範囲を明確にすることが重要である。本講演では、透析患者へのソシオエステティックの二つの実践報告を通じて、患者の生活の質を支えるケアの可能性と、医療職との連携に必要な条件を検討する。

第1の症例は、急性硬膜下血腫術後の意識障害により言語的な意思疎通が困難な70歳代女性である。コロナ禍の面会制限により、家族との交流も制約されていた。医師・看護師との連携のもと、週1回、ベッドサイドでハンド・フット・フェイシャルのケアが行われ、皮膚状態の改善とともに、穏やかな表情や視線による反応が観察された。

第2の症例は、糖尿病性腎臓病により血液透析を受け、皮膚乾燥と心理的不安を伴う70歳代男性である。生活保護を受給し、面会者がなく、孤立感や将来への不安を抱えていた。月1～2回、約7年間、計96回にわたり、保湿を含むハンド・フットケア等と会話・傾聴が継続された。経過中、皮膚乾燥の改善、掻破・出血の減少、自発的な保湿行動がみられ、安心や楽しみを語る発言が記録された。終末期には、全身状態に応じて清拭中心のケアへ調整された。

両症例から、身体へのケアを通じた継続的な関わりが、患者の反応や気持ちを受け止め、安心感や主体性を支える可能性が示唆される。一方、いずれも記述的な症例報告であり、介入との因果関係やQOLの改善を実証するものではない。

実践にあたっては、患者の意思とプライバシーを尊重し、医療職と目的、実施範囲、役割を共有することが重要である。日本エステティック協会の立場から、人材育成、実践記録の蓄積と評価方法の検討、経済的背景にかかわらないケア機会の確保、費用負担を含む継続可能な提供体制の整備を今後の課題として考察する。